

6 : 搾乳中蹴り行動の予防に関する研究－逃走距離、心拍数、乳頭先端スコア、
血中コルチゾール濃度との関係

畜産生命科学研究部門 古村 圭子・畜産管理学専攻 2 年
宇鉄 健史・家畜生命ユニット 4 年高瀬 康司

メールアドレス kfurt@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

搾乳中の蹴り行動は、搾乳者のケガの原因となりやすい。初産牛の蹴り行動の原因として、ヒトや乳房接触への不慣れが考えられる。本研究では育成期にヒトや乳房への接触に慣らすことが、分娩後の蹴り行動を抑制するのかどうかを検討した。

【方法】

妊娠鑑定後から分娩予定日 1 週間まで、週 1 回、10 分間の処置を行った（合計 28～30 回）。処置は、首を撫でる（首群、9 頭）、乳房を撫でる（乳房群、10 頭）、対照としてヒトがウシの横に佇立する（対照群、9 頭）の、3 処置を行った。処置群への供試牛の配分は、処置開始前の逃走距離が群間で均一になるように行った。分娩後に、搾乳過程（前搾り、拭き取り、ミルク装着時、装着中）ごとの蹴り回数と、搾乳前（搾乳 30 分以上前）と搾乳過程ごとの心拍数、搾乳前後の血中コルチゾール濃度を測定した。

【結果】

搾乳中の合計蹴り回数は、分娩直後（分娩後 2 日以内）、分娩後 30 日目以降の搾乳において、対照群より乳房群で有意に少なく、さらに分娩後 60 日目以降では、首群も対照群より有意に少ない結果となった（ $p < 0.05$ ）。前搾り時における蹴り回数は、乳房群が他の 2 群より有意に少なかった。搾乳前からの各搾乳過程の心拍数の増加量は、分娩直後では拭き取り時と搾乳中に乳房群が首群に比べ有意に低く、分娩 30 日目では前搾り時に乳房群が他の 2 群より有意に低かった（ $p < 0.05$ ）。育成期における乳房への接触馴致は、搾乳中の蹴り行動の抑制とストレス軽減に効果があった。